

● 井上さんの書籍紹介

講談社プラスアルファ新書  
最高の医療をうけるための患者学

上野 直人 著  
講談社 2006年7月 初版



はじめに

マスコミは、世界的に使われている抗がん剤が日本では使われていない、薬の承認に時間がかかる、日本のがん医療は欧米に比べて 20 年遅れているなどと報じている。しかし、著者、上野直人医師は、日本の医師の医療技術は欧米に比べ遜色ない、と断言する。

「日本とアメリカでいちばん大きな差は、医療そのものや医療従事者ではなく、患者さんの方である」と本書は言う。「相談にのろうとも、患者さんが自分の病気をきちんと説明できない。よって、相談にのれない。一方、アメリカには、自分の病歴、治療歴を簡潔にまとめて医師に渡す患者さんもいる。」また、患者さんと医師とが十分にコミュニケーションをとれていないことも指摘されている。では、これから日本の患者さんは具体的にどのような行動をしたらよいのか。これが、本書に書いてある。いわゆる、ノウハウ本なのである。

著者紹介

1964年生まれ。89年和歌山県立医科大卒業。横須賀米海軍病院での研修を経て、全米一のがん専門施設と評価されている、MD アンダーソンがんセンターに93年より勤務。2003年より同センターの准教授。2008年1月右大腿部の悪性軟部腫瘍(悪性線維性組織球腫)にて手術を受けられた。専門は、乳がん、卵巣がん、骨髄移植、遺伝子治療。日本では、「チーム医療」の推進者として活躍されている。

本書の内容・感想・まとめ

著者の提唱している「チーム医療」は、患者さんが中心である。医師、看護師等の医療従事者は、それぞれの専門性を生かして患者さんをサポートするのである。本書に、患者さんがチーム医療に参加するにはどのようにしたらよいか、九つのステップで簡潔に書かれている。

私も多くのことを、患者の立場として、医師の立場として学んだ。一部列挙する。

まず、標準療法と最新治療の違いについて。

一般に、「標準」というと「並」という感じを受ける。がん治療での「標準」というのは、それとは異なる。治療法の中で最もすばらしいのが、標準療法なのである。すべての人に最大限の効果を生むという確実な保証はできないが、少なくとも、一番高い確率で、最良の効果を生む可能性がある治療法なのである。他方、最新治療とは、効果があるかもしれないと最近試され始めた、もしくは、その治療法で効いた人がいたという新しい治療法。標準療法は常にアップデート(更新)されている。医師は常時、「どこに最新の標準療法があるか」勉強していなければいけない。同時に、患者さんもインターネットなどで調べる必要がある。「最新治療を調べる前に、まず、最新の標準療法を勉強することが大切である」と本書は教えてくれる。このことは、「ステップ6 ;その治療は標準療法ですか」に書いてある。

次に、学んだことは、「がん治療で大切なことは、ゴール(目的地)を決めること」。これは、患者さんがとにかく主体となってもらうしかない。最後は、患者さん自身が決め、医師に伝えなければいけない。とにかく病気を治すことを優先するのか、それとも治せない段階であり症状を抑えることをゴールとするのか。がん医療は、治すことだけがゴールではない。さらに、病状の進行によって随時ゴールを変更していかなければいけない。患者と医療者の治療のゴール(目的)がくい違ふと、患者さんにとって最も不幸なことになる。医療不信にもつながる。よって、何を目指して治療を行っていくのか、治療のゴールを主治医と共有することが大切である。以上、「ステップ7；ベストの治療法を決断する」より。

医師の立場として学んだことの一つは、今でもがんと言えば、「告知」が問題となる。さらに、病態が悪くなった場合、「本人にどのように説明するか」が問題となる。よくご家族は「本人に言ったら落ち込んで、体力も落ちてしまう。よって言わないでほしい。」「本人もうすうす感じていと思う。よってストレートに言わないでほしい。」と言う。

本書は言う。

『病気を知らないことの怖さを想像してください。体調の変化を感じて自分は何か重い病気ではないかと疑いを抱きはじめ、不安を感じる。不安はやがて恐怖に変わる。何もかも信じられなくなる。』『本人に告知しないのは、きわめて非倫理的なことである。もしそれが治らない病気であったとしたら、その人が残りの人生をどう生きたいか、どんな治療を選択するか、それは本人の問題です。』『よい医療従事者とは、末期であろうが、死が直前にせまっていようが、どんなときも患者さんと一緒に目標を設定して、二人三脚で歩いてくれるものだと思います。』

医師として、大いに反省させられるとともに、大切なことを教えていただいた。今後の診療に生かしたい。以上、「ステップ8；自分の希望を伝えましょう」より。

最後に本書の「はじめに」から抜粋する。

『システムが変わるには時間がかかるし、目の前にいる医療従事者を変えるというのもむずかしい。ところが、自分の行動を変えるのは簡単です。いまこの瞬間からできることです。医療の質を上げ、あなたが満足するためにも、ほかでもないあなた自身が今日から変ればいいのです。』

「自分で自分の病気を説明できますか」ここから始まります。そこから、この本を用いて一緒に勉強しましょう。そうすれば、いかなる段階でも、自分で「希望」という最大の薬を処方できると思っています。これこそが、「最高の医療」ではないのでしょうか。

会員 井上 林太郎